

# 自ら課題を見付け主体的に課題解決に取り組む児童の育成を目指して

— 体育科におけるバディシステムを取り入れた授業づくりを通して —

石巻市立大街道小学校 佐々木 秀

## 1 授業づくりに関わる課題

本校では、体力向上を目指した取組を工夫してきた。その結果、運動に対して意欲的な児童が多く見られるようになった。しかし、実際に体育の授業を行ってみると、運動能力に差があり、運動に対する自身の課題発見や課題を解決するための練習場所の選択、自分の考えや思いを伝え合うことに課題があると感じた。

新学習指導要領では、三つの資質・能力を育成する観点から、運動に関する「知識及び技能」、運動課題の発見・解決等のための「思考力・判断力・表現力等」、主体的に学習に取り組む態度等の「学びに向かう力、人間性等」それぞれに対応した目標や内容に改善された。また、運動との多様な関わり方を楽しむことができるようにする観点から、運動に対する興味や関心を高め、技能の指導に偏ることなく、「する、みる、支える」に「知る」を加え、三つの資質・能力をバランスよく育むことができる学習過程を工夫して、充実を図ることが記された。

そこで、児童が課題発見・解決のために、「協力」「安全」「楽しさ」の3つの視点からバディを組み、互いの考えや思いを伝え合うことで、体育における思考にもつながると考えた。このような経験を、年間を通して積み重ねることで、自分の課題を見付け、課題解決に向けて、自分の考えや思いを伝え合う「主体的に課題解決に取り組む児童」を育成できると考え、本研究主題を設定した。

## 2 研究の内容と方法

### (1) 研究の内容

本研究の研究主題に迫るため、目指す児童像を1「自ら課題を見付け、正しい練習場所を選択することができる児童」、2「課題解決に向けて、自分の考えや思いを伝え合うことのできる児童」と定め、以下の手立てを講じ、検証を進めていく。

#### ① 単元を通じたバディシステムの導入

事前調査を基に運動に対する課題を集約し、課題に合わせてバディを組ませ、単元を通して互いの課題を協力して発見したり、良さを認め励まし合ったりしながら学習することで、自分の課題発見・解決へと結び付ける。本研究のバディシステムを3つの視点で、以下の通り捉えた。

「協力」 自分では気付くことができない課題や解決する方法が分からないことでも、バディと一緒に考え、取り組むことで課題発見や解決に結び付ける。 【する・みる・知る】

「安全」 練習場所や運動器具の状態が安全かどうかをバディで確かめ合ったり、技の補助をしたりしながら運動に取り組むことで課題解決に結び付ける。 【する・知る】

「楽しさ」 互いのよさを認め合ったり、できた実感をバディで味わったりすることで、喜びを共有し、学習意欲に結び付ける。また、単元を通してバディを組んで運動をし、上達の様子を確かめ合うことで課題解決に結び付ける。 【支える】

#### ② 課題発見・解決を促すタブレット端末活用の工夫

タブレット端末に事前に示範動画を入れておき、自分の練習の様子と見比べさせることで、共通点や相違点に気付かせ、自分の課題発見に結び付ける。また、既習の技については、体育の時間以外にも、前時に撮影した動画を確認できるようにし、よりきれいに安定した技にするための課題を見付けさせる。そうすることで、体育の時間の前半に設ける既習の技を確かめる活動に、自分の課題を持って臨むことができるようにする。

#### (2) 検証方法

本研究の有効性を以下の方法で検証する。

- ① 児童の活動の様子を観察し、記録したものを分析する。
- ② 事前、事後の意識調査または実態調査から変容を見る。
- ③ 個々のタブレット端末に児童が見付けた課題や振り返りを記入させたものを分析する。

## 3 授業実践の成果と課題

### (1) I期実践：第3学年 器械運動「マット運動」 (成果：○，課題：●，II期に向けて)

I期の実践授業では、目指す児童像1「自ら課題を見付け、正しい練習場所を選択することができる児童」に重点を置き、課題発見のための手立てを講じ、児童の課題に合わせた練習の場を設定して行っ

た。

① 単元を通したバディシステムの導入

- バディを組むことで、誰の動きを見ればよいのかが明確になり、動画を確認しながらバディの友達の課題を意識してアドバイスする姿が見られた。
- 事後調査（7月20日実施）では、バディを組むことで、技ができていないことに気付く児童が多く見られた（図1）。

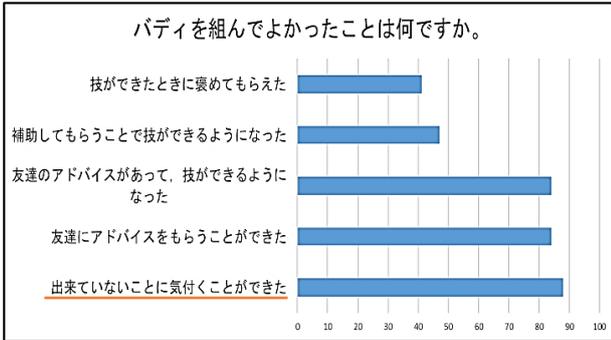


図1 研究の視点に関わる事後調査

- 運動を得意とする児童は、示範動画と自分の練習動画を見比べ、アドバイスする様子が見られたが、運動を苦手とする児童は、うまくアドバイスすることができていなかった。
- 動画を撮影し、アドバイスをする児童は見られたが、バディの友達の技を補助する児童が少なかった。

Ⅱ期に向けて

これまで、自分の課題を発見できなかった児童がバディでの活動を通して気付くことができたことは、大きな成果であった。しかし、中には、相手の動きを見ても、うまくアドバイスできず、課題解決までいかないバディも見られた。そこで、Ⅱ期の実践授業では、考えや思いを伝え合わせ、「できた」、「跳べた」という達成感をより味わわせるために、課題解決が滞っているバディと解決が進んでいるバディを組ませ、ツーバディ（4人）やスリーバディ（6人）にする。多くの児童との関わりを持たせ、多角的にアドバイスし合い、学び合いを深めることで課題解決に結び付けたい。また、技の補助だけでなく、跳ぶ際に、タイミングを声掛けするといった教え合いの中で、バディシステムの「楽しさ」を実感させ、互いのよさやできた喜びを共有できるようにさせたい。

② 課題発見・解決を促すタブレット端末活用の工夫

- 示範動画と自身の練習動画を2画面にして見比べることで、示範との共通点や課題となる部分を見つけている児童が多かった（図2）。



図2 タブレット端末上の示範映像と自分の動画の2画面

- 事後調査では、できなかった技ができるようになったと答えた児童が増えた（図3）。

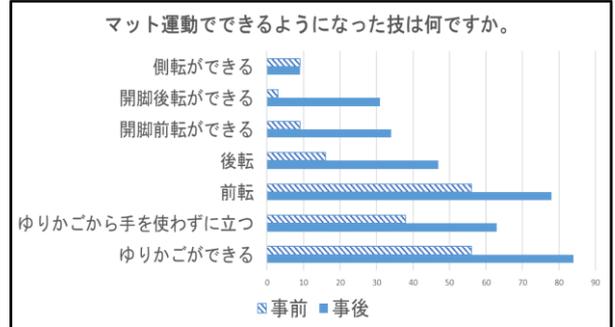


図3 事前調査と比較した事後調査結果

- 動画撮影に慣れていない児童は、撮影をしたり、撮影した動画の確認をしたりするのに時間が掛かり、運動量の確保が難しかった。
- 示範動画と自分の動画との相違点から課題に気付く児童がいたが、課題に合った練習場所を考えるのは難しい児童が見られた。

Ⅱ期に向けて

タブレット端末を活用し、示範映像と自分の動画を比較させることは、児童が課題を見付けることができ、有効であることが分かった。しかし、タブレット端末での撮影や動画の確認に時間が掛かることが分かった。Ⅱ期の授業実践では、撮影の時間を練習の最後と限定し、いつでも見られるようにすることで、運動する時間を多く設定できるようにする。

(2) Ⅱ期実践：第3学年 器械運動「跳び箱運動」

(成果：○, 課題●)

Ⅱ期の授業実践では、目指す児童像2「課題解決に向けて、自分の考えや思いを伝え合うことのできる児童」の育成に重点を置き、互いの課題解決に向けてアドバイスができるように、運動能力が似た児童同士でバディを組ませた。

① 単元を通したバディシステムの導入

- バディを運動能力が似た児童同士で組ませたことで、バディ内で課題が似たものとなり、課題に合った練習場所をスムーズに選ぶことができていた。また、互いの課題に合ったアドバイスがしやすくなり、Ⅰ期に比べると、アドバイスを活発にしているバディが多かった（図4）。



図4 課題に合った練習場所でアドバイスをし合う様子

- 練習の様子を見ながらワンバディだけでなく、ツーバディにしたことで、多角的にアドバイスし合ったり、跳び方の上手な人の練習を見たりして、学びが深まった。ワンバディに戻ってからも、バディからのアドバイスを頼りに練習に取り組む姿勢が多く見られるようになってきた。
- アドバイスだけでなく、助走してくるバディの友達に着手する跳び箱の位置を叩いて教えたり、跳び越える際に、お尻を押ししたりして、友達の課題に応じた補助の仕方を理解し、補助することで、技ができるようになった児童が見られた（図5）。



図5 バディの友達を補助する様子

- 児童が単元を通してバディを組み、練習の前に自分の課題を伝えることで、互いの課題を意識して練習に取り組むことができた（図6）。



図6 練習前に互いの課題を確かめる様子

- 事後調査（11月5日実施）から、バディの友達にアドバイスをもらったり、補助してもらったり

したことで、開脚跳びと台上前転ができるようになったと実感できた児童が多く見られた（図7）。

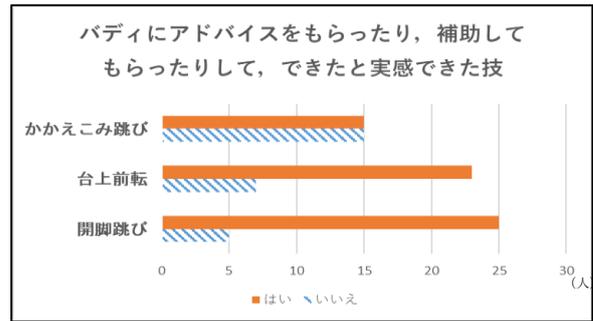


図7 事後調査結果

- 自分の課題に気づき、課題解決のためのアドバイスをもらっても、アドバイス通りに体を動かすことのできない児童がいた。
- 友達のアドバイスがうまく伝わらないバディもいたため、教師が分かりやすい動きやアドバイスの仕方を提示する必要があった。

#### ② 課題発見・解決を促すタブレット端末活用の工夫

- タブレット端末で撮影する時間を終末の1回だけにしても、課題発見や解決ができ、1時間あたりの運動量を十分に確保することができた。
- 1時間ごとにタブレット端末に自分の課題を書き込ませ、次時の導入で確認させることで、自分の課題を意識して練習に取り組むことができていた。また、自分の課題を段階的に見て分かるので、達成感や成長を児童自身で確認することができていた（図8）。

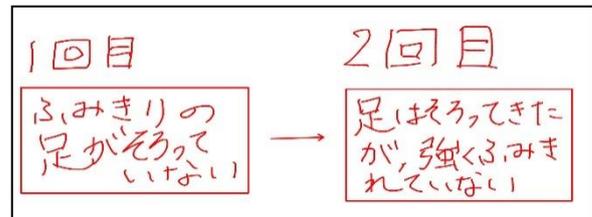


図8 1時間ごとの振り返りの記録

- タブレット端末に記録したことで、休み時間にも示範動画や撮影した自分の動画を見て、バディ同士でアドバイスし合う様子が見られた。
- 最後の発表会では、これまでの動画を振り返り、自信を持って発表できる技を選ぶ児童が見られた。
- タブレット端末の操作に慣れない児童にとっては、振り返り（課題の記入）に時間が掛かっていた。

## 4 研究の結果と考察

I期の授業実践では、目指す児童像1「自ら課題に気づき、正しい練習場所を選択することができる児童」に重点を置き、課題発見のための手立てを検証した。また、II期の授業実践では、目指す児童像

2「課題解決に向けて、自分の考えや思いを伝え合うことのできる児童」に重点を置き、課題解決のための手立てを検証した。

(1) 目指す児童像1「自ら課題に気付き、正しい練習場所を選択することができる児童」について

図9の事後調査の「バディを組むことは役立ちましたか」という質問に対して、94%の児童が役に立ったと回答している。さらに、「バディとしてどんなことができましたか」という質問に対して、「①友達の課題を見付けて教えてあげた」と「②課題に合わせた練習場所を選んであげた」と回答する児童が見られ、目指す児童像1に迫ることができた。その要因としては、運動能力が似ている児童同士、バディを組ませたことで、バディ同士の課題が似た、あるいは共通したものになり、課題に合った練習場所をスムーズに選択することができていたと考えられる。また、タブレット端末を活用し、示範動画と自分の動画を2画面で比較させたことで示範動画との相違点に気付き、課題発見につながったと考えられる。

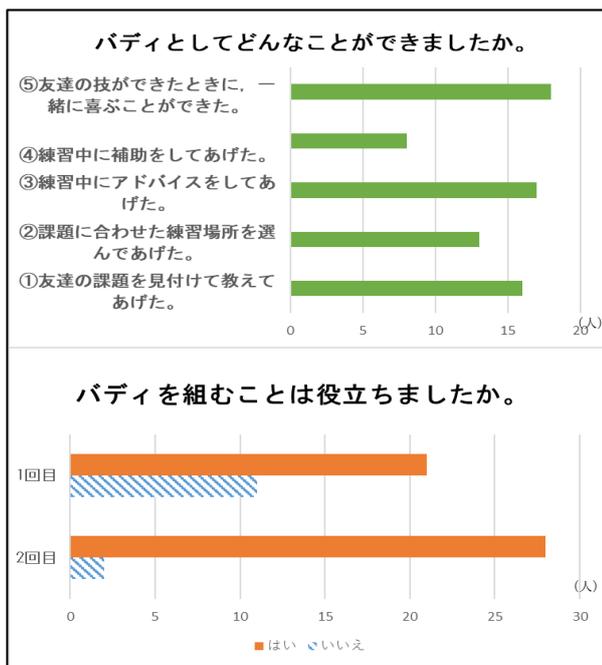


図9 2回目の事後調査結果

(2) 目指す児童像2「課題解決に向けて、自分の考えや思いを伝え合うことのできる児童」について

図9の事後調査の「バディとしてどんなことができましたか」という質問に対して、「③練習中にアドバイスしてあげた」と回答した児童が半数以上見られた。単元の最後に記述した振り返りシートにも図10のようなアドバイスについての記述も見られ目指す児童像2に迫ることができた。その要因としては、バディで課題解決が滞った際に意図的にツーバディを組ませ、多角的にアドバイスさせたことで、自分の考えや思いの伝え方を理解することができた

と考えられる。また、タブレット端末を活用して、課題が明確になったことで、互いにアドバイスし合うことができたと考えられる。

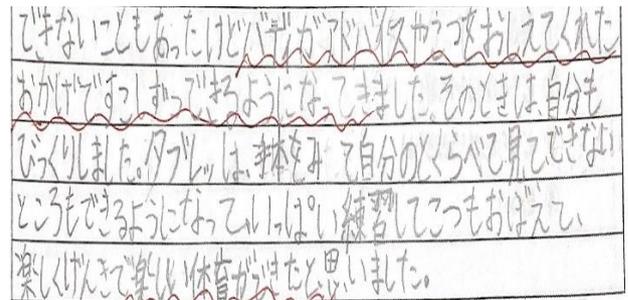


図10 児童の振り返り

(3) バディシステム3視点について

「協力」の視点で、課題を見付ける、練習場所を選択する、アドバイスをするといったバディの役割が定着し、バディの友達と一緒に考え、取り組むことで課題発見・解決につながった。

「安全」の視点では、運動する場の安全だけでなく、バディの友達の課題に合った補助の仕方を理解し、補助することで技ができ、喜びの共有につながった。

「楽しさ」の視点では、アドバイスによって技ができたことで、本人だけでなく、バディで喜びを分かち合うことができ、自信につながった。

バディで活動することで、人間関係が深まり、互いに上達しようという意識を持つことができた。また、学びを深めるためには、1単位時間ごとにペアを変えるのではなく、単元を通してバディを組ませ学習に取り組むことが有効であった。

今年度の実践を通して、課題発見・解決に向けて児童が主体的に取り組む姿勢が身に付いたことは良い成果であった。しかし、単元によって運動能力が違うことから、それぞれの単元で課題を明確にし、バディを組ませていく必要があると考える。また、タブレット端末をどの場面でどのように活用させるかをしっかりと考えなければ、運動量が大きく減ってしまう可能性がある。新たに見つけた課題を2年目につなげて、さらに研究に精進していきたい。

【図表等の許諾について】

図1～10は授業実践の中での児童の様子と学習感想の一部、実践後の意識調査である。児童が特定できないようにすることとし、児童の保護者及び所属校長から使用許諾を得た。